古典文学に描かれる「鳴門の渦潮」

小島　明子

はじめに

日本の古典文学の中において「鳴門の渦潮」を描くものは、それほど多くはないことが調査の結果として明らかとなってきた。そこで「渦潮」の語が含まれず、単に「鳴門」という語が使用される用例についても必要に応じて言及しつつ、本稿では考察を展開することとする。

一　上代から中世の和歌世界における「鳴門」

徳島県に在住していると、「鳴門」と言えばただ一つのように認識されるのであるが、実はそうではないことをまずは理解しておく必要がある。そもそも「鳴門」という語は辞書的には「狭い海峡で潮の干満の際、潮流が激しく流れ、渦を巻いたりして鳴り響くところ」と説明されるものである（1）。徳島県と兵庫県との間の鳴門海峡（いわゆる「阿波の鳴門」）の他では、山口県柳井（やない）市（旧大畠（おおばたけ）町）と大島との間の「周防鳴門」、すなわち「大嶋の鳴門」が著名である。従って、古典文学に描かれる鳴門にも両者があるので、この点を注意しなければならない。はじめに上代から中世の和歌世界の中で、そうした「大嶋の鳴門」を押さえておきたい（2）。

①　過二大嶋鳴門一而経二再宿一之後追作歌二首

巨礼也己能　名尓於布奈流門能　宇頭之保尓　多麻毛可流登布安麻乎等女

杼毛

（これやこの　なにおふなるとの　うつしほに　たまもかるとふ　あまをとめども）

右一首、田辺秋庭

（『万葉集』巻十五・三六六〇）

この①は飛び抜けて古く『万葉集』に取られる歌である。しかも二重傍線部には「渦潮」とあることから、阿波の鳴門のきわめて古い用例のように誤解されがちである。しかし、歌の前におかれた「詞書」、すなわちその歌が詠まれた状況などを説明する箇所には「過二大嶋鳴門一而（大島の鳴門を過ぎて）」と明記されているため、この①は阿波の鳴門を詠んだ歌ではないことがわかる。

②　女につかはしける　　よみ人しらず

人しれず思ふ心はおほしまのなるとはなしになげくころかな

（『後撰和歌集』巻九恋一・五九三）

③　おほしまのなるといふ所にてよめる　　恵慶法師

宮こにといそぐかひなくおほしまの
なみだのかけぢはしほみちにけり
（『新勅撰和歌集』巻六冬・五〇四）

④　つくしへくだり侍りける道にて　重之
あまのはら波のなるとをこぐ舟のみやこ恋しき物をこそ思へ
（『玉葉和歌集』巻八旅歌・一二二九）

⑤　題不知　正三位知家
おもふことなほしきなみにおほしまの
なるとなくてとしのへぬらん
（『続古今和歌集』巻十八雑歌中冬・一七〇三）

それぞれの歌の作者を見てゆくと、③の恵慶法師は平安時代の村上朝から一条朝の歌人、④の重之は寛弘五年（一〇〇八）頃没かとされる歌人、⑤の正三位知家は寿永元年（一一八二）生、正嘉二年（一二五八）没の歌人である。

これらの②③⑤の歌には「おほしまのなると」とはっきり詠み込まれている。加えて④は「おほしま」の語は含まれないものの、詞書に「つくしへくだり侍りける道にて」とあり、歌が詠まれた時代の都から筑紫への道筋を考え合わせるとこれも大嶋の鳴門の方がふさわしいと思われるのである。

次に、上代から中世の和歌の中で、大嶋の鳴門か阿波の鳴門か特定しがたい歌を確認してゆく。

⑥　春宮になるといふとのもとに、女と物いひけるに、おやの戸をさしたててゐていりにければ、又のあしたにつかはしける　藤原滋幹
なるとよりさしいだされし舟よりも我ぞよるべもなき心地せし
（『後撰和歌集』巻十恋二・六五一）

⑦　女のもとにゆきて物いひけるに雨のいみじうふりければいとくらうて空もみえぬに、夜なかばばかりに戸をひきたてて入りぬれば　壬生忠見
おとに聞くなるとの浦にかづきする
あまよわびしきめをみするかな
（『新千載和歌集』巻十二恋二・一二三八）

⑧　奈良の人人百首歌よみ侍りけるにうらみの心をよめる　権僧正永縁
おもはんとたのめし人のむかしにも
あらずなるとのうらめしきかな
（『金葉和歌集（二度本）』巻八恋下・四三〇）

⑨　恋二百首
恋ごろもいかになるとのうづしほに
たまもかるあまもそではほすらん

（『為家千首』・六七九）

⑥の歌の作者・藤原滋幹は承平元年（九三一）没とされるが、この歌は春宮御所にある「鳴戸」と呼ばれる「戸口」に、地名の「鳴門」と掛けて用いるもので、所謂「掛詞」という技巧が使われる。歌意は、戸口の「鳴戸」を女の親が閉ざしたために、女と逢えなくなってしまった私は、「鳴門（地名）」から出て行く船よりも一層よるべない状態で弱り果てています、というものである。また「掛詞」に加えて、地名の「鳴門」から連想される言葉、所謂「縁語」が用いられていることも特徴の一つである。この⑥では、縁語は太い傍線を付した「舟」の部分であるが、以下本稿では、和歌に付した太い傍線は「鳴門」の縁語を示すものとする。

⑦の歌は、平安中期の村上朝の歌人・壬生忠見の作で、縁語の「浦」「あま」が詠み込まれている。ちなみに「あま」は自分が恋している女性の寓意である。⑧の歌は、永承三年（一〇四八）生、天治二年（一一二五）没の権僧正永縁の作で、縁語の「浦」と「うらめし」が掛詞となっている。そして、⑨は建久九年（一一九八）生、建治元年（一二七五）没の為家の作で、恋の気持ちがどのようになるというのか、という意味の「なると」と地名の「鳴門」の掛詞が用いられている。実は「鳴門」が歌に詠まれる場合、かなりの割合を占める技巧がこの「（……の状態に）なると（いう）」と地名の「鳴門」との掛詞であることが顕著な傾向である。またこの⑨には「うづしほ」も詠み込まれているが、これは①の歌の影響によると考えられるものである。

以上の⑥～⑨の歌に対して、「阿波の鳴門」と明確に判別できる和歌も少なからず存在するのであり、次にそれを引用する。

⑩　なるとの浦、阿波

保安二年九月内大臣家歌合、恋　　俊頼朝臣

くれゆけばしのびもあへぬわがこひや
なるとのうらにみつしほのおと

（『夫木和歌集』巻二十五雑部七・一一五〇九）

⑪　遠き人をこふといふことをよめる　　源宗光女

便りあらばむやのはまぐりふみみせよ
遥なるとの浦に住むとも

（『月詣和歌集』第五恋部・四七一）

⑫　恋歌とてよめる　　藤原経家朝臣

契りしにあらずなるとのはまちどり
あとだにみせぬうらみをぞする

（『千載和歌集』巻十五恋五・九五〇）

⑬　讃岐院の百首のなかの恋歌

いかにせんあはのなるとにひくしほの

ひきいりぬべきこひのやまひを

（『教長集』恋部・七〇二）

⑩の歌は、久寿二年（一〇五五）頃の生、大治四年（一一二九）頃の没の俊頼の作で、詞書に「阿波」の語が入っているため、間違いなく特定が可能である。また⑪は、寿永元年（一一八二）賀茂別雷社へ役奉納した歌で、「撫養」の地名が詠み込まれていることから判断できるものである。続く⑫は、久安五年（一一四九）生、承元三年（一二〇九）年没の経家の詠歌で、歌に詠み込まれた「はまちどり」の語が淡路島の景物とされることから、この鳴門は阿波の鳴門と判別できる。さらに⑬の歌は、院政期に活躍した歌人の教長が、「讃岐院（崇徳院）百首」に詠出したものであることが詞書に記されるが、歌中に「あは」が詠み込まれ、阿波の鳴門であることが明示される。

和歌の修辞技巧としては、「大嶋の鳴門か阿波の鳴門か特定できない歌」の傾向と重なっていて、「（……の状態に）なると（いう）」と地名の「鳴門」との掛詞の使用が多く、縁語は「うら」「しほ」「ちどり」などが使用されることが挙げられる。

しかも、「大嶋の鳴門か阿波の鳴門か特定できない歌」も「阿波の鳴門と判断できる歌」もみな恋の歌であることに気づかされる。ここに列挙したのは数例に過ぎないが、平安時代、和歌における「鳴門」の語は、多く掛詞や縁語などの修辞技巧の一環として機能し、恋歌に主に詠み込まれると言うことができるのである。むろん、⑩の歌は激しく満ちてくる潮の音を詠んでもいるが、その詞書に「恋」とあるようにあくまで恋の歌であり、また「歌合」で詠まれたことからみても、実景を見て詠んだのではない、観念的な歌と見るのが妥当である。

続いて鎌倉時代の和歌の数例を見たい。

⑭　なるとのはま、阿波

千五百番歌合　　家長朝臣

きみがよははるかなるとのはまびさし
ひさしきかげは神のまにまに

（『夫木和歌集』巻二十五雑部七・一一七八八）

⑮　秋日詣住吉社詠百首和歌　雑五十首

すみよしの松のあらしにかよふなり
あはのなるとの浪のおとまで

（『拾玉集』第二・一五三三）

⑯　詠百首倭歌今以廿五首題各寄四季之心　海

さえさふる冬のしほかぜ北吹きて
あはのなるとの音ぞはげしき

（『拾玉集』第二・二一九八）

⑭は建仁二年～三年（一二〇二～三）の「千五百番歌合」において読まれた歌で、作者の源家長は生年未詳、文暦元年（一二三四）没である。これを採録した『夫木和歌集』は藤原長清撰の私撰集で、延慶三年（一三一〇）頃に昔中頃の歌仙の家集と代々の勅撰集に洩れた秀歌を集めるという方針で編纂されたものである。⑮⑯は天台座主として有名である、久寿二年（一一五五）生、嘉禄元年（一二二五）没の慈円の私家集に残される歌である。⑭は君が世の長久を願う祝意の歌で、⑮⑯は二首とも叙景の歌であるが、やはり、これらすべてその詞書から実景の歌ではないことが明らかにわかるのである。

こうした上代から中世の和歌世界における「鳴門」の位置づけは、以下の『歌枕名寄』の「阿波の鳴門」の項に端的に表れていよう。

鳴門　周防有同名、大島鳴門周防歟、仍多載彼所、風早鳴門伊与載之

後二　藤原滋幹

八八〇五　なるとよりさし出されし船よりも
我ぞよるべはなきここちせし

右、春宮の鳴戸といふとのもとにて、女と物申しける時、おやのとをおしたてて入りにければ、又のあしたにつかはしけるとなん

金八　永縁

八八〇六　おもはんとたのめし人のむかしにも
あらずなるとのうらめしきかな

千十五　経家

八八〇七　ちぎりしにあらずなるとの浦千鳥
あとだにみせぬうらみをぞする

六帖　俊成

八八〇八　誰ぞこはなるとの浦におとするは
とまりもとむるあまのつり舟

八八〇九　日くるればしのびもあへぬ我が恋や
なるとのうらによるしほのおと

源仲正

八八一〇　里のあまはなるとの波にみみなれて
たたく水鶏におどろかぬかな

八八一一　塩風のなるとはるかにあはぢ島
そがひに見えてわたる舟人

千五百　良平

八八一二　ゆく春の別はけふになるとより
船いだしてもいかにたづねん

家集　重之

八八一三　天の原波のなるとをこぐふねの
みやこ恋しき物をこそおもへ

同　壬生忠見

八八一四　おとにきく鳴とのうらにかづきする
あまよわびしきめをみするかな

平安時代以降、和歌に詠まれる地名はほぼ固定化してゆき、それが「歌枕」と呼ばれる。『歌枕名寄』は、中世以来、数多く編まれた名所歌集の一つであるが、他の名所和歌に比して最も組織的かつ重要とされるもので、「歌枕」を国別に三十六巻（これ以外に未勘国二巻）に部類した上、歌枕ごとに例歌を挙げてその出典と作者を記している。その『歌枕名寄』の「阿波の鳴門」の項には、本稿において「大嶋の鳴門か阿波の鳴門か特定できない歌」も例歌として提示されているあたり、厳密な考証は難しかったことが窺い知れる。ともあれ、『歌枕名寄』には十首の例歌が引かれていることから、「阿波の鳴門」はメジャーではないが、中程度には知られた「歌枕」の地であったと言うことはできるのである（3）。

二　上代から中世の散文世界における「鳴門」

本章では散文に目を転じてゆくこととするが、まず古く奈良時代の『日本書紀』巻第一神代上〔第五段〕一書第十に、鳴門海峡らしきところが描かれている以下の箇所が指摘できる（4）。

伊弉諾尊聞而善之、乃散去矣。但親見二泉国一。此既不レ祥。故欲レ濯二除其穢悪一、乃往見二粟門及速吸名門一。然此二門、潮既太急。故還二向於橘之小門一、而払濯也。

伊弉諾尊聞しめして善めて、乃ち散去けたまふ。但し親ら泉国を見たまへり。此既に祥からず。故、その穢悪を濯ぎ除はんと欲し、乃ち往きて粟門と速吸名門とを見す。然るに此の二門、潮既に太だ急し。故、橘之小門に還り向ひて払ひ濯ぎたまふ。

【語注】

●粟門……鳴門海峡。

●速吸名門……潮流が吸い込まれて速くなる海峡。四国佐田岬と九州佐賀関の地蔵岬との間の豊予海峡。

●橘之小門……宮崎県の小戸（小さな河口、水門）の橘（地名か）の檍原。今の大淀川の河口付近に比定する説もある。

ここは、伊弉諾尊が、亡くなった妻の伊弉冉尊を死の国である黄泉の国から連れ戻そうとして不首尾に終わり、二神の生死の別れが決定する場面で、伊弉諾尊は黄泉の国の穢れを禊をして清め、多くの神を生む、というくだりである。傍線部の「粟門」が鳴門海峡をさし、その潮の急なことが描かれているのであるが、結局は伊弉諾尊は「橘之小門」で禊ぎをすることとなり、鳴門への言及は残念ながらそれ以上はないのである。

次に、平安時代初期の『土佐日記』の記載を見たい。『土佐日記』の作者・

紀貫之は土佐守の任期を終え、承平四年（九三四）十二月二十一日に土佐を出立し、京へ向かい、その途中、一月二十九日に鳴門の付近に立ち寄っている（5）。

（一月…稿者注）二十九日。船出だして行く。うらうらと照りて、漕ぎ行く。

（中略）

おもしろきところに船を寄せて、「ここやいどこ」と、問ひければ、「土佐の泊」といひけり。昔、土佐といひけるところに住みける女、この船にまじれけり。そがいひけらく、「昔、しばしありしところのなくひにぞあなる。あはれ」といひて、よめる歌、

年ごろを住みしところの名にし負へば
来寄る波をもあはれとぞ見る

とぞいへる。

三十日。雨風吹かず。海賊は、夜歩きせざなりと聞きて、夜中ばかりに船を出して、阿波の水門をわたる。夜中なれば、西 東も見えず。男、女、からく神仏を祈りて、この水門をわたりぬ。

寅卯の時ばかりに、沼島といふところを過ぎて、たな川といふところをわたる。

【語注】

●土佐の泊……鳴門市の大毛島。『土佐日記』の中で、室津（高知県室戸町室津とされる）を出港以後、初めて出てくる具体的地名。

●なくひ……通説では文脈から「同類」の意の「たぐひ」といふ語の存在が考えられ、「なたぐひ」の「た」が脱落したものとされる。

●阿波の水門……「水門」は両側から陸地が迫って狭い水路のこと。ここは鳴門海峡を渡るの意となるが、実際は鳴門と淡路島の南端潮崎との間を航行したはず。

●沼島……兵庫県三原郡南淡町沼島。淡路島の南方約四メートルにある小島。

一つ目の傍線部に、現在も残る「土佐の泊」の地名が書かれているのであるが、貫之の関心は、自然や風景ではなく、海賊の難を如何に逃れるかにあったと思われる。翌日の航海の様子が二つ目の傍線部に「夜中ばかりに船を出して、阿波の水門をわたる。夜中なれば、西 東も見えず」とあり、「渦潮」にはまったく注意を払うことがなく、ここを通過していったことが窺い知れる。

貫之は、我が国最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の編者の一人である。貫之の和歌や著作は後に多大な影響を与えていることから、彼が「渦潮」を実景として歌に詠み込んだり、あるいは『土佐日記』で「渦潮」を活写したりしていれば、追随作が多数生まれたと推測されるが、それは叶わなかったのである。

続いて鎌倉時代に入るが、平安末期の源平の合戦を描いた『平家物語』の原型は、鎌倉時代に入った一二三〇～四〇年代に成立したとされているものである。ただし『平家物語』は、諸本の間できわめて大きな異同があり、延慶本・覚一本・『源平盛衰記』など『平家物語』の諸本は数多くあり、それぞれの本文にも相違点が大きいことに注意が必要である。

『平家物語』で第一に着目すべきは、寿永三年（一一八四）二月、一ノ谷の合戦の後の逸話で、ここに鳴門の地名が登場する。破れた平家一門が香川県の屋島に逃れる途中の船中の描写で、戦死した平通盛の北の方・小宰相が、夫の最期のさまを聞いて嘆き、入水して夫のあとを追うという箇所である。

ⓐ『源平盛衰記』巻三十八「小宰相局慎夫人」（6）

イズクヲ西ハワカネ共、月ノ入サノ山ノ端ヲ、ソナタト計伏拝、海ヘゾ飛入給ケル。

（中略）

屋島へ漕返夜半計ノ事ナレバ、船人モ皆ヨリ臥シタリケルニ、楫取共是ヲ見テ、「コハイカニ、女房ノ海へ入給ヌルゾヤ」ト訇（ののしり）ケレバ、乳母子ノ女房打驚キ心迷シテ、傍ヲ探ルニ人モナシ。「穴心ウヤ、アレヤ〳〵」ト叫ケレバ、各（おのおの）海ニ飛入テ、取上奉ラントシケレ共、折シモ月サヘ朧ニテ、阿波ノ鳴戸ノ癖ナレバ、満塩引塩諍（あらそひ）テ、潜（もぐれ）共々見エザリケリ。相構テ取上タリケレバ、此世ニモハヤ無人（なき）ニ成給ニケリ。

ⓑ『延慶本平家物語』巻三十八「三十　通盛北方ニ合初ル事　付同北方ノ身投給事」（7）

阿波ノ鳴戸ノ塩ザカヒ、満塩引（みつしほひく）塩早シテ、浮バ沈ミ、沈バ流ルヽウシホニテ、立波引浪打懸テ、鴨ノ上毛モウズモレヌ。心ニ舟ヲモマカセネバ、ヲリシモ月ハヲボロナリ、衣（きぬ）モ白シ、波モ白カリケレバ、シラミアヰテ、シバシハ浮上リ給ヘドモ、ミワクル方モナカリケレバ、トミニモ取上奉ラズ。

ⓒ『平家物語』巻九「小宰相身投」（8）

……海にぞ沈み給ひける。一の谷より八島におしわたる夜半ばかりの事なれば、舟の中（うち）しづまつて人是をしらざりけり。（稿者注…以下も鳴門の描写ナシ）

この⓪『源平盛衰記』の傍線部では、入水した小宰相を引き上げようとしたものの、「阿波ノ鳴戸ノ癖ナレバ、満塩引塩諍テ、潜共〳〵見エザリケリ」と記され、渦潮らしきさまが描写されている。

これが次のⓑ『延慶本平家物語』になると、対応する傍線部は「阿波ノ鳴戸ノ塩ザカヒ、満塩引塩早シテ、浮バ沈ミ、沈バ流ルヽウシホニテ」となって、少しニュアンスが変わり、潮の満ち引きの速さがクローズアップされることになる。

そして、現在最も読まれることが多いⓒの覚一本系では、「一の谷より八島におしわたる夜半ばかりの事なれば、舟の中しづまつて人是をしらざりけり」と描かれるだけで、鳴門の地名も潮のさまも描出されていない。覚一本系の『平家物語』は『源平盛衰記』『延慶本平家物語』より後に成立した本文と思われるのであるが、鳴門に対する描写が刈り込まれてしまっている。

そもそも兵庫県の一ノ谷の沖合から、香川県の屋島へ舟で移動するのに、鳴門付近を通過するというのはあり得ない航路であると思われるのであるが、その点については『平家物語』の作者も享受者もほとんど注意を払っていなかったと思しい箇所である。

また『平家物語』で第二に挙げたいのは、先ほどと同年の三月、平維盛が屋島を離脱して、和歌山の那智に向かうという記事である。この箇所については以下に引用するが、『源平盛衰記』も覚一本系の『平家物語』もそれほど大きくは異なるものではない。

ⓐ『源平盛衰記』巻三十九「維盛出二八島一」

三月十五日ニ、与三兵衛尉重景、石童丸ト云童、舟ニ心得タル者トテ武里ト申舎人、此三人ヲ具シ給ヒ、忍ツヽ屋島ノ館ヲ出テ、阿波国由木浦ニゾ着給フ。

（中略）

サテモ御舟ニ乗移給、音ニ聞阿波ノ鳴門ノ沖ヲ漕渡リ、紀伊ノ路ヲサシテ楫ヲ取。

ⓒ『平家物語』巻十「横笛」

さる程に小松の三位中将維盛卿は、身がらは八島にありながら、心は都へかよはれけり。

（中略）

元暦元年三月十五日の暁、しのびつつ八島の館をまぎれ出でて、与三兵衛重景、石童丸といふ童、船に心得たればとて、武里と申す舎人、これら三人を召し具して、阿波国結城の浦より小舟に乗り、鳴門浦を漕ぎとほり、紀伊路へおもむき給ひけり。和歌、吹上、衣通姫の神とあらはれ給へる玉津島の明神、日前、国懸の御前を過ぎて紀伊の湊にこそつき給へ。

【語注】

●元暦元年……一一八四年。三月に寿永三年より改元。

●阿波国結城の浦……徳島県海部郡美波町（旧由岐町）の海岸。ただし屋島から山越えに由岐へ行き、船で鳴門浦を通ったのいうのは、地理的に不可解。

●和歌、吹上……和歌の浦、吹上の浦。共に和歌山市の海岸。

●玉津島の明神……和歌の浦にあり、祭神は稚日女命。和歌の神として名高い。

●日前、国懸……和歌山市秋月にある神社。

ⓐの『源平盛衰記』の傍線部を見ると「音ニ聞阿波ノ鳴門ノ沖ヲ漕渡リ、紀伊ノ路ヲサシテ楫ヲ取」とあり、鳴門はそれなりに著名な地名であることが窺

えるのは確かである。ただし、屋島を出てから、「阿波国由木浦」までは陸路で、そこから「御舟ニ乗移給」として、舟で鳴門を渡るとしている点は納得しがたいものがあろう。なぜ、わざわざこうした道順としたのか理解できない箇所であり、このあたりからも『平家物語』作者が実景を把握した上で物語を書いたのではないことが推察できるのである。

この後、室町時代になると『太平記』が成立するが、その中には以下の二箇所に「鳴門」が描かれている。ただし㋐は「周防の鳴渡」と書かれ、「大嶋の鳴門」の記事であって、「阿波の鳴門」ではない。和歌のみならず、散文でも「大嶋の鳴門」が描かれる例として押さえておきたい（9）。

㋐『太平記』巻十一「上野介時直長門探題降参の事」

さる程に、長門探題遠江守時直も、……長門を落ちて、大船百余艘にて上られけるが、周防の鳴渡より、京・鎌倉を責め落されぬと聞き給ひしかば、鳴渡より舟を漕ぎもどして、九州の探題と一つに成らんと志し、筑紫に趣き給ひけるが……

㋑『太平記』巻十八「一宮御息所の事」

その日の暮れ程に、阿波の鳴渡を過ぐるところに、にはかに風替り塩に向ふて、この舟さらに行き遣らず。舟人帆を衝いて、近辺の磯へ舟を寄せんとすれば、澳の塩合に大きなる穴の底も見えぬが出できて、船を海底に沈めんとす。水手・梶取ども周章、帆菰などを投げ入れ投げ入れ、雲珠に巻かせて、その間に舟を漕ぎ通さんとするに、舟かつて去らず。雲珠の巻くに随つて、浪とともに舟の回る事、茶臼を推すよりも速やかなり。「これは何様竜神の財宝に目を懸けられたりと覚えたり。何をも海へ入れよ」とて、弓箭・太刀・刀・鎧・腹巻、数を尽くして投げ入れたれども、雲珠のまく事なほ止まず。「さてはもし、色ある衣装にや目を見入れたるらん」とて、御息所の御衣、赤き袴を投げ入れたれば、白浪変じて、紅日の浸せるが如くなり。これにうづは少し閑まりたれども、船はなほ本の所を回り居たり。かくて三日三夜になりければ、船中の人独りも起き上がらず、皆船底に酔ひ臥して、声々にをめき叫ぶこと限りなし。

（中略）

かかるところに、楫取一人船底より這ひ出でて、「この鳴渡と申すは、竜宮城の東門に当つて候ふ間、何にても候へ、竜神の欲しがらせ玉ふ物を海へ沈め候はねば、何もかやうの不思議ある所にて候ふ。これは如何様かの上臈を、竜神の思ひ懸け申されたりと覚え候ふ。申すも余りに邪見に情けなく候へども、この御事独りの故に、若干の者どもが、皆非分の死を仕らん事は、不便の次第にて候へば、この上臈を海へ入れ進らせて、百余人の命を助けさせ玉へかし」とぞ申しける。

（中略）

松浦は御息所を海へ投げ入れようとするが、一人の僧がそれを留める。僧の勧めによって、舟中の者どもが観音の名号を唱えると、浪の上に不思議

の者が次々と現れては消える。

楫取これを見て、「灘を走る舟に不思議の見ゆる事は、常の事にて候へども、これは如何様武文が怨霊と覚え候ふ。その験を御覧ぜんために、小舟を一艘下ろして、この上臈を乗せ進らせ、浪の上に突き流して、竜神の心を如何にと御覧候へかし」と申せば、「この議げにも」とて、小舟を一艘引き下ろして、水夫一人と御息所をのせ奉り、雲珠の漲つて巻き却る浪の上にぞ浮かべける。

（中略）

されば竜神もえならぬ中をや去けられけん、風にはかに吹き分けて、松浦が舟は西をさして吹かれ行くと見えけるが、一谷の澳津より武庫山下風に放たれて、行方知らずとなりにけり。その後浪閑まり風止みにければ、御息所の御舟に乗せられつる水夫甲斐甲斐しく舟を漕ぎ寄せて、淡路の六嶋といふ所へ着け奉る。

【語注】

●六嶋……神田本「ム嶋」、西源院本「六嶋」、徽古館本「武嶋」。淡路島の南方の沼島に御息所漂着の伝承がある。

一方、㋑は「阿波の鳴門」に関する記事で、これが今回の稿者の調査の中では最も「鳴門の渦潮」を文学的にうまく生かした描写をもつものと言える。場面は、元弘元年（一三三一）三月、後醍醐天皇一宮（中務卿・尊良親王）が動乱の中で土佐の畑へ流され、宮に近侍する秦武文が一の宮の妻の御息所を連れて下ろうとするというくだりである。ところが途中の尼崎で、御息所は筑紫の松浦五郎に奪われてしまい、武文は海底の竜神となって松浦の航行を阻止すると誓って、自害する。

以下は本文の傍線の箇所を参照するが、まず一行が「阿波の鳴渡を過ぐるところに、にはかに風替り塩に向ふて、この舟さらに行き遣らず」とあり、それに対して「舟人帆を衝いて、近辺の磯へ舟を寄せんとすれば、澳の塩合に大きなる穴の底も見えぬが出できて、船を海底に沈めんとす」と、かなりリアルで恐ろしげな渦の描写がなされる。続く傍線部の「雲珠の巻くに随つて、浪とともに舟の回る事、茶臼を推すよりも速やかなり」も、比喩が効いているのであるが、これに困り果てた舵取りの一人が「この鳴渡と申すは、竜宮城の東門に当つて候ふ」と言う。鳴門は竜宮の東門に該当するという興味深い伝承がここに語られることが注目されるのである。

その後は、御息所を竜神に捧げて難を逃れようとする松浦と舵取りたち、それを止める僧が描かれ、やがて、海上に異形の者の姿が現れては消えるという展開となり、これらの珍事は先に自害した武文の怨霊の仕業であることが示される、それを恐れた松浦は御息所を小舟に乗せて、渦巻く海中に流し、御息所の小舟は淡路の六嶋に行き着くというのがその顛末である。

竜宮城は、「浦島太郎」などで知られるように、理想郷とも言える豊穣な世

界というプラスの面と、地獄と類似した苦界というマイナスの面の双方を備えていることは、仏書や文学作品から知られるところである（10）。鳴門がその竜宮城の東門であるというのは、渦潮に対する人々の畏怖の念の反映と言ってよいと思われる。

こうした『太平記』と同様に室町時代には大成されたのが能楽で、その台本にあたるのが謡曲である。謡曲は韻文の要素も強いのであるが、散文的な要素もあり、本章で言及したい。まずは、謡曲『通盛』は修羅物の夢幻能であるが、『申楽談義』に作は「井阿弥」と書かれるが、さらに同書に「通盛、言葉多きを切り除け切り除けして能になす」とも記され、世阿弥が詞章に手を加えていることがわかる。今日まで上演され続けている、いわゆる現行曲で、先に見てきた『源平盛衰記』や『延慶本平家物語』を摂取して作られた曲で、その概要を次に示す。

阿波の鳴門に面した海岸で夕方、一人の僧が平家一門が討たれたことを思いつつ、法華経を読誦していると、小舟に乗った老人と姥（現行では若い女）が現れる。二人は、平通盛の討死を悲しんだ妻の小宰相が入水したことを語り、やがて海に飛び入って消える。同日の深夜、同所、通盛と小宰相の回向をする僧の前に、二人の霊が在りし日の姿で現れ、戦いの前夜の離別の悲しみ、通盛の戦死の有様を仕方話で語る。今はともに修羅道におちて苦患を受けていると訴えるが、読経の功徳によって、二人は成仏得道の身となる。

この曲の中では以下に引く〔名ノリ〕の箇所が「阿波の鳴門」を明示する詞章を含んでいる（11）。

〔名ノリ〕ワキ　これは阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候、さてもこの浦は平家の一門あるひは討たれ、または海にも沈み給ひたる所にて候、あまりに御痛はしう候ふほどに、毎夜この磯べに出でておん経を読み奉り候、只今も出でて弔ひ申さばやと思ひ候。

さすがに世阿弥の手が加わっているだけに、この謡曲「通盛」はかなり格調が高い作品となっているのだが、もっと卑俗な作品と言える謡曲『鳴門』（「鳴渡」とも）という現在能がある。これもまずその概略を示したい。

京で上東門院に仕える和泉式部が玉津島に参詣する途中、鳴門の鳴動を留める者を求める高札を見て、わざと身をやつし阿波へ赴く。領主は式部を舟で海に運ぶ。鳴門の海は竜宮の東門であるが、末世のためか人々の心がよこしまになって、龍神をあざけるので、八大龍神が怒り波が荒立っていることが語られる。式部が「きつね草おのが種にてなるものをあはのなるとは誰かいふらん」と歌を詠むや、波は静まる。人々は驚き、名乗るよう

に求めるが、式部は「凡詠歌の其徳は不思議をなさん為ならず。人の歎きを休めつゝ、直ならしめん和歌ぞかし」と和歌の神髄を語り、「いやしき身には名もなし」と去って行く。

この謡曲『鳴門』も、謡曲『通盛』と同様に〔名ノリ〕の箇所に「阿波の鳴門」を含む詞章が次のように置かれている（12）。

〔名ノリ〕ワキ 是は阿波国板野郡の領主、古川貞時にて候。扨も当国鳴門の沖、鳴動する事夥しう候て、数日止む事なし。さるに依って西海往還の船とゞまり、民の煩ひ限りなく候程に、国中の貴僧高僧、是を修すれど其験なし。上代には猿丸太夫、此の鳴門の鳴動を、歌にて静め給ふとは承り候へども、今は澆季の世となり、歌道に妙を得たりといふ人なし。たとひ賤しき者なりとも、鳴門の鳴動を静めん術あらば、功は望みたるべしと、高札をたてばやと存じ候。

和泉式部が鳴門の鳴動を止める者を求める高札を見て、阿波へ赴き、和歌の功徳によって波を沈めるというのは、非常に荒唐無稽な筋と言えよう。また和歌も和泉式部の詠とは到底考えられないお粗末な読み口である。ただ興味深いのは、鳴門の海は竜宮の東門であるが、人々の心がよこしまになって、龍神をあざけるので、八大龍神が怒り波が荒立っていることが語られていて、本章で見てきた『太平記』の影響を受けた作品であることが見て取れる点である。ちなみに、この謡曲『鳴門』が作られたのはそれほど古くはないと思われる上に、詞章もかなり拙いため、今日では上演されることがない番外曲という扱いになっている。

三　近世文芸における「鳴門」

本稿第一章で、上代から中世の和歌世界における「鳴門」について見てきたが、近世に入るとそれらとは異なる動きが生じてくる。まず和歌世界では、以下のような和歌の出現である。

なると をよめる
わたつみの 鳴門 は竜のかどなれば
うしほもたきとおつるなりけり

（『晩花集』・四五三）

この『晩花集』は、延宝九年（一六八一）、下河辺長流の編んだ私家集であるが、ここには鳴門の「うしほ」すなわち潮流が滝のように激しいさまが盛り込まれ、観念的な詠ではなく、鳴門の実態に添った詠となっている点が顕著な特徴をなす。この歌には「鳴門は竜のかど」とあるが、「かど」は「門」のこ

とで、鳴門が竜宮城の東門にあたるというのは第二章で見てきた『太平記』に依るものと考えられる。『太平記』伝承の広がりを窺い知ることができる好例と見なせよう。

また、次の長歌も詳細な描写がなされる叙景歌として特筆できるものである。

阿波鳴門をよめる　　藤原正根

天地の　はじめの時に　二柱　御祖の神の　恐くも　うみなしましし　二神の　なしのままかも　大名持　少名毘古那の　神はかり　はかり給ひて　つくらしし　これの鳴門が　御食向ふ　淡路と阿波の　こちごちの　国の御中の　荒磯の　磯山の間ゆ　時時に　みちひる汐の　荒潮の　汐の八百あひに　滝津湍の　塩の早瀬は　和田中の　五百津巌村も　青波の　なみの上にも　時自久に　花と咲きちり　時自久に　雪とふりしき　風浪の　しづけきときは　並たてる　松の嵐の　松の枝　ふきをるばかり　吹きあらび　あるるがごとく　あら塩の　満ちひる時は　千万の　鳴神の音　天地に　響動（トドロク）なして　きく耳も　見るめも綾に　諸人の　おびゆるまでに　なりとよむ　鳴門の海ぞ　しかのみは　はげしき海を　ゆふづつの　かゆきかくゆき　海人の子が　小舟こぎいで　此海の　おのがしわざと　若海布かり　魚つりいそはき　まさきくて　わたらふみれば　わたつみの　神のまもりの　いちしろく　ちはひますらし　海幸の神のちはひか　奇しくも　あやしくもあるか　阿波のなる門は

大舟のいゆきはばかる鳴門の海さきくてわたる海士のつりぶね

（『八十浦之玉』下巻下・雑部・一〇二六～一〇二七）

長歌とそれに伴う反歌をなした藤原正根は、江戸時代初期の国学の先駆者で、『万葉集』の研究などでも知られる。当該の長歌と反歌は、上代の語彙・風体に倣って詠んだ歌を集めた歌集『八十浦之玉』に採られている。

さらに、近世になると中世以前に比して諸国の往来が盛んになることが影響してであろう、散文の世界に鳴門の実景を描くものが登場してくる。まずは戯作者として世に名高い井原西鶴の手になるものを挙げたい。

『西鶴名残の友』巻三の一「入日の鳴門浪の紅ゐ」（13）

世の中をわたりくらべて、舟路は旅の難儀なり。然も冬海（ふゆうみ）になつて、浪風あらき時、阿波の鳴門見にさそふ人有。

行ゑもしらぬ淡路嶋、神代のむかし道、今に馬次も定まらず。かりや・釜口（かまぐち）などいふ里をすぎて、志筑（しづき）といふ浦辺につきぬ。

（中略）

程なく阿波の徳嶋につきて、俳友に葎友（りつゆう）・釣竹（ちやうちやく）寂・吟夕（ぎんせき）などにあひて、俳諧興行の会かさなりて、心ざしたる鳴門見にまかりしに、音に聞きつるよりすさまじく、高浪白雲の風につるゝごとく、渦巻中程は、竜宮摺鉢か

と、ひゞきわたるにおどろきぬ。久しく見るさへ魂（たまし）ひこりければ、慰み替て、里の海士といふ所、「又も来て見ん磯崎の松」と、西行法師が読（よみ）残せしも、まことにおもしろの気色や。

【語注】

●かりや・釜口……兵庫県津名郡淡路町仮屋および釜口。

●志筑……兵庫県津名郡津名町志筑。

●里の海士……鳴門市撫養町あたりの里浦。

●西鶴の徳島訪問……元禄三年（一六九〇）あるいは元年・二年の十一月より十二月にかけてとされる。

この『西鶴名残の友』は西鶴没後の元禄十二年（一六九九）四月、西鶴庵を継いだ北条団水によって出版された第五番目の遺稿集で、五巻四冊から成る。古今の俳人・俳諧師たちの逸話・奇譚集、俳諧師西鶴の手記・漫談・俳論などの要素を持つものである。

引用の箇所は、西鶴が実際に鳴門を訪問して記したもので、傍線部に「渦巻中程は、竜宮摺鉢かと、ひゞきわたるにおどろきぬ」とあり、ここでもやはり『太平記』に書かれた伝承の影響が見られることが興味深い。しかしながら、西鶴はさほど渦潮には興味を示すことなく、「里の海士」すなわち今日の「里浦」の方にすぐに話を転じているのであった。

また、加藤景範が天明元年（一七八一）に記した『観濤（かんとう）記』は看過できない著作で、以下のようにきわめて写実的に鳴門の光景を活写している(14)。

磯よりさし出たる島を、あふの島といふ、そのさきより大毛山にかゝり、岨道を廻りて峯にのぼれば、海は鏡のやうにかゞやく、かく波風のなぎたるを正民見て、舟にてくべかりけるものをば、船長が何に得はからぬかたひ也けりとつまはじきす。

（中略）

その南に黒き岩山をとび島といふ、東は淡路島にて、このひた表にむかふ、峯の西のかたへつらなり出でたるが、そのしま根と、はだか島と一里ばかりなるが、あはひ岩瀬のやうに白浪さわぐ所鳴門なり、そのあたり渦まく、おもふに此海の底とこなめの岩にて、その間にありかね、土の底とほりたるに、穴いくそばくとなく有なるべし、唐土に鰌穴尾閭澤焦などあらぬことわりをかまへ出せるも、此たぐひなるべし。落潮のさかりのさまをきくに、波の上に数しらずうずまくが、見るがうちにくぼかに心やをちいりてふかく入り、海づら高くひきく、際だてゝ彼渦の中へ滝をなして落る、そのひゞきは山とゞろき巌ゆする、此南より北より落くるうしほ、こゝに行あふほどに、山のごとき波をおとすめり、その潮のとき事、矢をたとふるもにぶく、みるにめくるめくとなん、今少しはやからば、それを見るべきにと、口々にうらむるに、峯久は耳を何方へもやらまほしげなり、とかくするほどに見し波もしづまりぬ、正民は猶はらふくらせるをなぐさめて、

翁、

立ちかへりまたきて見よや高波を
鳴門の神やとくしづめけん

加藤景範は、享保五年（一七二〇）生、寛政八年（一七九六）没の大阪出身の歌人・国学者である（15）。家業の薬商を生業とする傍ら、書・国学・和歌・画を学び、懐徳堂で和学を領導しているが、画業にも通じた眼が渦潮の文学的描写に存分に発揮されていることが見て取れる。

なお、文学作品とは言い難いのであるが、近世文芸の中の「鳴門」を窺い知る資料として、「寛政七卯月六月」の跋文を持つ本が残る『戸辺集』、もしくは『鳴門戸辺集』と呼ばれる鳴門の地誌にも触れておきたい。ちなみに、幕府は将軍の御代替わりごとに、藩の状況を視察させる巡検視を派遣しているが、寛政七年（一七九五）にその案内役を務めた者が作者と考えられている。

この『戸辺集』の「土佐泊浦」の項に見える「亀磯」「龍宮石」「絹掛ケ松」の記載を見てみよう（16）。

一　亀磯
此亀磯撫養口の沖にあり、昔秦の武文が死霊此所ニ而松浦が船に追付キ三日三夜漂流させし所也、委敷ハ太平記みるへし、武文が死霊此所へ来リし印にや此磯ニ住ム蟹甲に文之字有

一　龍宮石
此龍宮石里浦へ渡ル海中ニ有リ、満汐ハみへす、通船度々難船ニ及ゆへに印を建而も潮早ク浪高ク流失ス、御巡検視様御通船之節ハ印シをたてる
（中略）

一　絹掛ケ松
此きぬかけ松小宰相此海中ニ身を沈メ給いし時絹をかけ置給いしゆへ絹掛松といふ、今の松ハ代木也、昔之松ハ古木して木末残リ岡崎村蓮華寺ニ有リ

「亀磯」「龍宮石」は第二章で引用した『太平記』を受けたものであり、「絹掛ケ松」も同様に『平家物語』を受けている。『戸辺集』は鳴門の在地で成立した文献であるが、そこに語られる伝承には、鎌倉時代・室町時代の文学に見られる「鳴門」および「渦潮」のイメージが摂取されていることが明らかにわかり、文芸世界の広がりを示す貴重な資料ともなり得ている。

最後に、俳諧に目を転じて、『増補俳諧類船集』の「鳴門」の項目を押さえたい（17）。

◇鳴門（ナルト）　阿波　浦　沖
淡路がた　那古浦　浜庇（ハマヒサシ）　水鶏　千鳥　貝　蜑　堂の浦　おのころしま

通盛（ミチモリ）　小宰相の局（ツボネ）　もづく　武文（タケブン）か怨霊（ヲンレウ）　若和布（ワカメ）

この『増補俳諧類船集』は梅盛著で、延宝五年（一六七七）の序をもつ俳諧辞典である。いろは順に付合語を挙げ、その見出し語に関わる詩歌・幸若・歌謡、故事・物語・草子、能・狂言、地名などを示している。付合の語を考える際に参照された付合語辞典の性格をもつ。これを見ることによって、近世初期、俳諧に携わった人々が「鳴門」に抱く一般的なイメージが窺い知れるもので、これまで見てきた文芸世界と重なり合っていることがわかるのである。

さて俳諧の実作を見てゆくと、「鳴門」の地名だけであれば詠まれた句は数多いのであるが、そこに「渦潮」「渦」も加わるとその例はきわめて少なく、その一つが『大坂檀林桜千句』に収められた井原西鶴の句である（18）。

追加　渦桜
杯（さかづき）やなるとの入日渦桜　　西鶴（一〇〇一）

この『大坂檀林桜千句』は青木友雪が編み、延宝六年（一六七八）刊行された。桜の句を立句とする百韻十巻と追加一順を収める。連衆は、編者の友雪・益翁・由平・均朋・本秋・夕烏・益友・素敬・柴舟・如昔・西鶴ら大坂檀林の一派である。当該の句は、追加の一順に位置し、当然ながら実景を見て詠んだものではない。

また、『其袋』には蕉門の氷花の句がある（19）。

鵆（ちどり）
鳴門なる渦にまかれそ浦ちどり　　氷花（六五八）

『其袋』は嵐雪が編んだ俳諧撰集で、元禄三年（一六九〇）に刊行された。江戸蕉門の連衆の句が収められている。先に引いた『増補俳諧類船集』の項目の通りで「鵆（ちどり）（千鳥）」の題から「鳴門」が喚起され、「渦」も詠み込まれている句である。

さらに時代が下って『俳諧新選』にも「鳴門」と「渦」が合わせて詠まれた句がある（20）。

稲妻
稲妻を渦に巻つつ鳴戸（ママ）哉　　春爾（一二六九）

この『俳諧新選』は、嘯山編、元文から明和頃までの、諸家の発句を四季雑に類題編集し、安永二年（一七七三）に出版された。当該の句は「稲妻」から「鳴戸」「渦」を導いた珍しい句である。

おわりに

「はじめに」で述べたように、古典文学に描かれる「鳴門の渦潮」はあまり多数とは言えない。その理由としては、稿者は以下の二点の要因を考えている。

第一は、「鳴門の渦潮」を詠み込んだ名歌の欠如である。上代から中世の文学作品は畿内を中心に成立していて、そこに位置する地名が多く出現するのは当然の成り行きであるが、都から遠く離れた土地の地名でも豊富な伝承世界を生むケースはないわけではない。その場合には、著名な歌人による名歌が必須で、後続の歌人・文化人はその著名な歌人の跡を踏むためにかの地を訪れ、名歌を踏まえた和歌を詠み、かつそれを散文に記していく、そしてそれが重層的に折り重なっていく。しかしながら「鳴門の渦潮」の場合はその名歌に恵まれていなかったのである。

第二は、信仰との結びつきが脆弱であったことが挙げられる。本稿第二章で㋑として取り上げた『太平記』巻十八「一宮御息所の事」で鳴門は竜宮の東門にあたるという興味深い記載があり、それは後の謡曲・和歌にも摂取され、またそこからさらに広がって地名にも反映されていることが江戸時代の地誌によって窺い知れるのは確かである。ただ、同じ竜宮の伝承でも、香川県の志度寺に伝わるものの方は非常に著名である。これは大化元年（六四五）大化の改新の立役者である藤原鎌足を主人公として、竜宮の宝珠をめぐる争奪戦を描き出したもので、「志度道場縁起」・謡曲「海人（あま）」・幸若舞曲「大職冠」が形成され、またそれらを奈良絵本・絵巻に仕立てたものも非常に多く作られた（21）。これに比して、寺社を背景としない「鳴門の渦潮」は如上の展開と無縁とならざるを得ず、やや知名度に欠けることとなったと言えよう。

ただし、古典文学の中で「鳴門の渦潮」についての記載を概観したときには、上代・中古・中世は観念的な描写がなされることが多く、近世になると写実的な描写が散見されるという大きな傾向は指摘できると考えられるのである。

注

（1）日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編、二〇〇一年、『日本国語大辞典』第二版・第十巻、小学館による

（2）本稿の和歌の引用はすべて、新編国歌大観編集委員会監修　二〇一二年、『新編国歌大観　ＤＶＤ―ＲＯＭ』、ＫＡＤＯＫＡＷＡによる。歌番号もこれによるが、傍線などは稿者が付した。

（3）堀章男「西鶴と鳴門（上）（下）」（『語文と教育』六号・七号、一九九二年八月・一九九三年八月）。

（4）本文の引用は、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳、一九九四年、新編日本古典文学全集『日本書紀①』、小学館による。底本は、寛文九年版本。

（5）本文の引用は、菊池靖彦・木村正中・伊牟田経久校注・訳、一九九五年、新編日本古典文学全集『土佐日記・蜻蛉日記』、小学館による。底本は、東海大学附属図書蔵青谿書屋本。

（6）本文の引用は、久保田淳・松尾葦江校注、二〇一五年、中世の文学『源平盛衰記（七）』、三弥井書店による。底本、内閣文庫蔵慶長古活字本。

（7）本文の引用は、谷口耕一編、二〇〇三年、『校訂延慶本平家物語（九）』、汲古書院による。底本は、大東急記念文庫蔵本。

（8）本文の引用は、市古貞次校注・訳、一九九四年、新編日本古典文学全集『平家物語②』、小学館による。底本は、高野本（覚一別本）。

（9）本文の引用は、長谷川端校注・訳、一九九四年、新編日本古典文学全集『太平記①』、小学館による。底本は、水府明徳会彰考館蔵天正本。

（10）浅野祥子「龍宮について―地獄へとの類似性―」（『国文学踏査』一五号、一九八九年三月）、小番達「建礼門院が見た夢―龍宮城へ墜ちた平家一門―」（『日本文学』六二巻八号、二〇一三年八月）。

（11）本文の引用は、横道萬里雄・表章校注、一九六〇年、日本古典文学大系『謡曲集 上』、岩波書店による。底本は、法政大学能楽研究所堀池識語本。

（12）本文の引用は、芳賀矢一・佐佐木信綱編、一九一五年、『校註謡曲叢書 第三巻』博文館による。

（13）本文の引用は、谷脇理史・冨士昭雄・井上敏幸校注、一九八九年、新日本古典文学大系『武道伝来記・西鶴置土産・万の文反古・西鶴名残の友』、岩波書店による。

（14）本文の引用は、神宮司庁編、一九七七年（洋装版・初版は一九一三年）『古事類苑 地部三』、吉川弘文館による。

（15）朝日新聞社編、一九九四年、『朝日日本歴史人物事典』、朝日新聞出版。

（16）本文の引用は、鳴門市史編纂委員会編、一九八八年、『―鳴門市史下巻別冊―鳴門辺集』、鳴門市による。

（17）本文の引用は、Ｗｅｂ版古典俳文学大系　巻十七所収『増補俳諧類船集』による。

（18）本文の引用は、飯田正一・榎坂浩尚・乾裕幸校注、一九七一年、古典俳文学大系　巻三『檀林俳諧集』、集英社による。

（19）本文の引用は、阿部喜三男・阿部正美・大礒義雄校注、一九七二年、古典俳文学大系　巻六『蕉門俳諧集一』、集英社による。

（20）本文の引用は、鳥居清・山下一馬校注、一九七〇年、古典俳文学大系　巻十三『中興俳諧集』、集英社による。

（21）恋田知子「お伽草子が描く海」（鈴木健一編『海の文学史』二〇一六年、三弥井書店）、関原彩「竜宮城はどこにある？」（同前）。

参考文献

○浅野祥子　一九八九「龍宮について―地獄へとの類似性―」『国文学踏査』一五

○朝日新聞社編　一九九四　『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞出版
○市古貞次校注・訳　一九九四　新編日本古典文学全集『平家物語②』小学館
○片桐洋一　一九九九　『歌枕歌ことば辞典　増補版』　笠間書院
○菊池靖彦・木村正中・伊牟田経久校注・訳　一九九五　新編日本古典文学全集『土佐日記・蜻蛉日記』　小学館
○久保田淳・馬場あき子編　一九九九　『歌ことば歌枕大辞典』　角川書店
○久保田淳・松尾葦江校注　二〇一五　中世の文学『源平盛衰記（七）』　三弥井書店
○恋田知子　二〇一六　「お伽草子が描く海」『海の文学史』（鈴木健一編・三弥井書店）
○小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳　一九九四　新編日本古典文学全集『日本書紀①』　小学館
○小番達　二〇一三「建礼門院が見た夢―龍宮城へ墜ちた平家一門―」『日本文学』　六二―八
○西條益美　一九八五　『鳴門海峡―隠れていた鳴門淡路島・港・神々―』　徳島教育出版
○神宮司庁編　一九七七（洋装版・ただし初版は一九一三）　『古事類苑　地部三』　吉川弘文館
○新編国歌大観編集委員会監修　二〇一二　『新編国歌大観　ＤＶＤ―ＲＯＭ』　ＫＡＤＯＫＡＷＡ
○関原彩　二〇一六　「竜宮城はどこにある」『海の文学史』（鈴木健一編・三弥井書店）
○谷口耕一編　二〇〇三　『校訂延慶本平家物語（九）』　汲古書院
○谷脇理史・冨士昭雄・井上敏幸校注　一九八九　新日本古典文学大系『武道伝来記・西鶴置土産・万の文反古・西鶴名残の友』　岩波書店
○鳴門市史編纂委員会編　一九七一　『鳴門市史　別巻―鳴門に関する文芸作品集―』　鳴門市
○鳴門市史編纂委員会編　一九八八　『―鳴門市史下巻別冊―鳴門辺集』　鳴門市
○日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編　二〇〇一～二〇〇二　『日本国語大辞典』第二版・全十三巻　小学館
○芳賀矢一・佐佐木信綱編　一九一五　『校註謡曲叢書　第三巻』博文館
○長谷川端校注・訳　一九九四　新編日本古典文学全集『太平記①』　小学館
○久松潜一・井本農一編　一九七一～一九七七　『古典俳文学大系』全十六巻　集英社
○堀章男　一九九二・一九九三　「西鶴と鳴門（上）（下）」『語文と教育』六・七
○山下一海・雲英末雄・玉城司・竹下義人・宮脇真彦・佐藤勝明・越後敬子・伊藤善隆編　二〇〇四　『古典俳文学大系ＣＤ―ＲＯＭ版』　集英社
○大和武生　一九九七　『阿波・近世文化の諸相』　徳島出版

○横道萬里雄・表章校注　一九六〇　日本古典文学大系『謡曲集　上』　岩波書店

（鳴門教育大学）